

## ニライカナイ遥拝のテイルルと

## 一般家庭廻りのテイルル

畠山 篤

## はじめに

イザイホー 沖縄県久高島で一二年に一度、午歳の十一月一日から一八日までイザイホーが執り行われていた。久高島の概況、祭祀組織については畠山篤(二〇〇一a)に、イザイホーの次第(儀礼)、神歌(一一種類)のうたわれる場、祭の趣旨については畠山(二〇〇一b)に、イザイホーの神歌の分類、泉神遊びのテイルル、髪垂れ遊びのテイルルについては畠山(二〇〇一c)に、朱付け遊びのテイルルについては畠山(二〇〇二c)に、桶廻りのテイルルについては畠山(二〇〇二a)に、柄杓取りのテイルルと綱のテイルルについては畠山(一九九二)に、イザイホーの元テイルルとタ(暁)神遊びのテイルルについては畠山(二〇〇二b)に、それぞれ述べたので、参照されたい。

本論のねらい 本論では、イザイホーでうたわれる神歌(一一種類)のうち、Ⅶニライカナイ遥拝のテイルルとⅧ一般家庭廻りのテイルルを取り上げ、次第(儀礼)を考慮しながらその主題と構造を考察し、イザイホーの祭祀世界を明らかにする。

## 一 ニライカナイ遥拝のテイルル

Ⅶニライカナイ遥拝のテイルル まず、四日目のⅦニライカナイ遥拝のテイルルを検討する。この神歌は、bノロのシジの来臨とcナンチュのウプテイシジの来臨を述べ、それにかかわる儀礼について述べている。

この神歌の本文と共通語訳は、比嘉(一九九三a、三八七頁)の「ニラーハラー遥拝のテイルル」を引用する。A・Bなどの段落区分と節を示す数字は、筆者が付した。

そして、仲宗根・湧上ノートの「ありくやぬテイルル」、安泉ノートの「アrikヤーの綱曳オモロ」、ならびに鳥越(一九六五)の「アrikヤー」と比較する。

なお、安泉ノートと鳥越(一九六五)は前二者とほぼ同工異曲であり、伝承状況は安定しているといえる。

## bノロのシジの来臨

## A 一 イズイ イズイ

ヌルガシジ イズイ

まかり出ました

ノロのシジ(始祖)神 まかり

出ました

## 二 アマミシジ イズイ アマミノロのシジ神 まかり出

ました

次に、仲宗根・湧上ノートを上げる。その引用は、外間・玉城（一九八〇a、六〇〇頁）による。

○ いぢゆい いぢゆい イヂユイ イヂユイ

○ あまみていぢ いぢゆい アマミテイヂ イヂユイ

Aは、bノロのシジがスベー嶽（シユビヤ嶽とも）から来臨している、と述べている。

ノロのシジの対語のアマミシジ（あまみていぢ）とは、アマミ親ノロ（大昔のノロの意）のことで、チバイ小（元家名）から出たというノロのシジ・アマミシジは血柄杓取りのティルルのBのヌルニシャーと同じであり、Aは血柄杓取りのティルルのB（ノロのシジの来臨）に相当している。

この段落は、イザイホーの元ティルルで述べられているbノロと根神のシジの来臨を前提にしている（後述）。

## c ナンチュの御嶽の決定

B 三 アタイガミ ヤトウテイ ノロたちに 命じて

四 ハクシヤマ サトウテイ タキダキを 決め

次に、仲宗根・湧上ノートを上げる。

○ あたいがみ やとーてい 当たり神であつて

○ はくしやま たとーてい 垣内山を悟つて

Bは、c ナンチュのウプテイシジの鎮まる御嶽を悟る（決定する）、と述べている。

Bの二節は対句である。垣内山はウプテイシジの鎮まる九つの御嶽を指しており、当たり神はそのなかの御嶽のナンチュに当てられたウプテイシジだと考えられる。ヤトウテイ（やとーてい）は難語だが、サトウテイ（たとーてい）の対語なので悟つての義になる。

Bは、一か月にわたる嶽廻り（儀礼）によってウプテイシジ・当たり神のいる御嶽（垣内山）を決定することを述べている。

## c ナンチュのウプテイシジの来臨

C 五 イザイホーバ ウルチ イザイホーを おろし

六 ナンチュホーバ フヌデイ ナンチュホーを 仕組んで

次に、仲宗根・湧上ノートを上げる。

○ いぢやいほーば うるち イヂヤイホーを降ろして

○ なんちゅほーば ふぬり ナンチュホーを企んで

Cは、c ナンチュのウプテイシジ（イザイホー・ナンチュホー・当たり神）を各御嶽から降ろして（企んで）ナンチュに憑ける、と述べている。

Cの二節は対句である。イザイホーとナンチュホー、ウルチとフヌデイ（ふぬり）は、対語である。フヌデイ（ふぬり）はオモロ語のコノミ（企み）の久高訛りである。Cは、イザイホー（ナンチュホー）を降ろす（企む）といっているのが、イザイホーとナンチュホーはナンチュに憑くウプテイシジと同義だと考えられる。したがって、イザイホー・ナンチュホー・ウプテイシジ・当たり神の実体は同じである。この段落は、イザイホーの元ティルルで述べられているc ナンチュのウプテイシジの来臨を前提にしている（後述）。

VII ニライカナイ選擇のティルルの構造 以上、VII ニライカナイ選擇のティルルの構造をまとめると、次の一覧表のようになる。

（ニライカナイ選擇のティルルの構造の「一覧表」）

段落 区分	主 題	現行 （比嘉）	仲宗根・ 湧上ノ ート	安 泉 ノート	鳥 越
A	bノロのシジの来臨	○	○	○	○
B	c ナンチュの御嶽の決定	○	○	○	○
C	c ナンチュのウプテイシジの来臨	○	○	○	○

ニライカナイへの報告 以上を要約すると、bノロはノロのシジを戴いて司祭し、cウプティシジの鎮まる御嶽のなからウプティシジを決め、cそのウプティシジを御嶽から降ろしてナンチュに憑けて、成巫式を見事に終えた、ということである。このように、VIIニライカナイ選擇のティルルは、bノロのシジの来臨とcナンチュのウプティシジの来臨を述べ、それにかかわる儀礼について述べている。

こうしてみると、比嘉(一九九三a、三八七頁)が説くように、この神歌はイザイホーが立派に終了したことを東方のニライカナイに報告していると考えられる。

## 二 一般家庭廻りのティルル

IX 一般家庭廻りのティルル 次に、四目目のIX 一般家庭廻りのティルルを検討する。この神歌は、c各御嶽のウプティシジの来臨と、それにかかわる儀礼について述べている。

この神歌の本文と共通語訳は、比嘉(一九九三a、三九六頁)から引用する。A・Bなどの段落区分と節を示す数字は、筆者が付した。そして、安泉ノートの「ナンツウの家でのオモロ」、ならびに鳥越(一九六五)の「ティルル」と比較する。

### c ナンチュのウプティシジの来臨

A 一 タマガエーヌ ナンチュ(神女)の

二 ウプティシジ 祖霊(守護神)

三 ウリテイ モーチ お降り(マツ)になって

次に、安泉ノートを上げる。

○ 玉がえーぬ

○ うぶていしぢ

○ うりていいもち

次に、鳥越(一九六五)を上げる。その引用は、外間・玉城(一九八〇a、五九二頁)による。

○ たまがえーぬ たまがえーの

○ うぶはみや 大神は

○ うりていいもち 降りていらつしゃって

Aは、cナンチュのウプティシジ(守護霊)が各御嶽からナンチュに降りる(憑く)、と述べている。

正確に言えばタマガエーはヤジク、ウンサク、タムトウの総称で、ナンチュを含まない。この意味で、ナンチュはタマガエーの予定者だといえる。したがって、タマガエーヌウプティシジは、タマガエーの予定者であるナンチュのウプティシジ(守護霊)ということになる。

このウプティシジは、鳥越(一九六五)によると、「うぶはみ」(大神)と言い換えられている。VIIニライカナイ選擇のティルルによると、ナンチュに割り当てられたウプティシジを当たり神ともいつているので、ウプティシジも大神も同じことである。ノロがスベー嶽に鎮まるノロのシジを降ろして(憑けて)ノロになるように、ナンチュも各御嶽のウプティシジ・大神を降ろして(憑けて)ナンチュになるのである。

この段落は、イザイホーの元ティルルで述べられているcナンチュのウプティシジの来臨を踏まえている(後述)。

### c 兄(弟)との対面

B 四 イシキヤートウ 兄と

五 ユシキヤートウ 対面させました

次に、安泉ノートを上げる。

○ いしきやーと

○ ゆていきやーし

次に、鳥越（一九六五）を上げる。

○ いしきやーとう

立派な兄と

○ ゆていきあわし

寄って気を合わせ

Bは、cウプティシジを戴いたナンチュが兄（弟）に直面する、と述べている。現に、ナンチュと霊的に一対になる兄（弟）は、ナンチュの家でナンチュを迎えて神酒を交わし、ナンチュが自分のオナリ神になったことを確認している。Bは、Cウプティシジの来臨にかかわる儀礼について述べている。

以上のA・Bから、イザイホーが兄（弟）を守護する神女・オナリ神になる儀礼だとわかる。

cナンチュのウプティシジの来臨 比嘉（一九九三a）と鳥越（一九六五）はA・Bで終わっているが、安泉ノートは次のC・Dを採録している。次にこれを引用する。C・Dの段落区分と節を示す数字、ならびに共通語訳は、筆者が付した。

C 六 玉がえーぬ

ナンチュ（神女）の

七 うぶていしぢ

守護霊が

八 うりていいもち

お降りになって

CはAとまったく同じで、cナンチュのウプティシジ（守護霊）が各御嶽からナンチュに降る（憑く）、と述べている。

この段落も、イザイホーの元テイルルで述べられているcナンチュのウプティシジの来臨を踏まえている（後述）。

c息子との対面

D 九 うんじぐわーと

息子と

一〇 ゆていきやーし

対面させました

Dは、cウプティシジを戴いたナンチュが息子に直面する、と述べている。

以上、A・BとC・Dは対になっている。こうしてみると、Bに相

当するDも、cウプティシジの来臨にかかわる儀礼について述べていることになる。すなわち、イザイホーはナンチュが息子をも守護する神女になる儀礼だということになる。

神歌と儀礼の合致 ところが、一九四二年（昭和一七）のイザイホーを調査した鳥越（一九六五）の報告をはじめとして現行の儀礼に至るまで、ナンチュの息子が一般家庭廻りの儀礼に参列していたという報告がない。このC・Dは誤伝だろうか。

しかし、今までもしばしば見てきたように、神歌と儀礼の次第は元来よく合致している。ナンチュは島の男と結婚した三〇歳から四二歳の女性になるから、一人前の息子や娘を持つているのが普通である。また、当間・友利（一九八二、二七六頁）によると、一九七八年にはスジがナンチュの実家（兄弟の家）からと嫁ぎ先（息子の家、ナンチュの家）から提供され、当間（一九七四、一一四頁）によると、一九六六年にはスジが兄弟と息子によって供えられている。こうしてみると、ナンチュの息子も、かつてはナンチュの兄（弟）とともに一般家庭廻りの儀礼に参列し、ナンチュと対面して神酒を交わしていたと考えられる。

また、安泉ノートの著者・安泉松雄氏は久高ノロの夫君なので、古い伝承を知りうる立場にあった。一九四二年以前には安泉ノートに記す神歌とおりの儀礼だったと考えるべきである。

正月のタマガエーのウプティシジのウムイ そして、ナンチュの息子が兄（弟）とともに一般家庭廻りの儀礼に参列していたことは、正月の儀礼とそこでうたわれる「タマガエーのウプティシジのウムイ」からわかる。

正月の元旦と三日目に一人前の男たちとタマガエー（一般神女のタムトウ・ウンサク・ヤジク）たちが、外間殿に参集し、根神（と外間ノロ）と酒（泡盛）あるいは神酒を交換する。この時、「タマガエー

のウプティシジのウムイ」が繰り返したわれる。この「タマガエーのウプティシジのウムイ」とは、IX「一般家庭廻りのティルルと曲も詞章も同じものである。すなわち、タマガエーと兄（弟）、息子が参列している場で、タマガエーが兄（弟）と息子に直面していると述べているのである。このイザイホーの「一般家庭廻りと正月における儀礼と神歌の照応関係は、イザイホーが兄（弟）とともに息子を守護する神女になる儀礼だということを明示している。

タムトウ祝い さらに、ナンチュウの息子が兄（弟）とともに「一般家庭廻りの儀礼に参列していたことは、タムトウ祝いのあり方からもわかる。

比嘉康雄（一九九三a、四一九〜四二四頁）によると、ナンチュウは六〇歳になるとタムトウに昇格するが、その昇格式であるタムトウ祝い（五月の粟の初穂祭の前日）では新タムトウの息子が兄（弟）とともに儀礼に参列して新タムトウと神酒を交わす。そして、そこでうたわれる「タムトウ祝いのティルル」で、タムトウが兄（弟）とともに息子の願いを叶える、と述べている。このイザイホーの「一般家庭廻りとタムトウ祝いにおける儀礼と神歌の照応関係も、イザイホーが兄（弟）とともに息子を守護する神女になる儀礼だということを明示している。

IX「一般家庭廻りのティルルの構造 以上、IX「一般家庭廻りのティルルの構造をまとめると、次の一覧表のようになる。

（一般家庭廻りのティルルの構造の一覧表）

区分	主 題	現行 (比嘉)	安泉 ノート	鳥越
A	c ナンチュウのウプティシジの来臨	○	○	○
B	c 兄（弟）との対面	○	○	○

C	D
c ナンチュウのウプティシジの来臨	c 息子との対面
×	×
○	○
×	×

## 結び

神霊の来臨・去来とそれにかかわる儀礼（二類） 以上、VIIニライカナイ選擇のティルルとIX「一般家庭廻りのティルル、ならびに畠山（一九九一）に述べた皿柄杓取りのティルルとVIII網のティルルを合わせた四種類の神歌群（二類）は、イザイホーの元ティルルに述べられているa来訪神（ニライカナイの神）の来臨、bノロと根神のシジの来臨、cナンチュウのウプティシジの来臨を踏まえている。そして、改めて神霊（a・b・c）の来臨・去来を述べ、それら神霊の来臨・去来にかかわる儀礼について述べている。

## ＜テキスト＞

考察の対象にしたイザイホーの神歌のテキストは、次のとおりである。

○高橋六二 一九七九a 「神遊び」 『神の島の祭り イザイホー』

雄山閣

○宜保栄治郎 一九七九 「イジャイホーの神歌」 『イザイホー調査報告書—久高島イザイホー民俗文化財特定調査—』 沖縄

県教育委員会

○比嘉康雄 一九九三a 『神々の原郷久高島 上巻』 第一書房

○大城学 一九九三 「イザイホーの儀礼と歌謡」 『沖縄久高島のイ

ザイホー』 砂子屋書房

○仲宗根政善・湧上元雄 一九六八 『仲宗根政善・湧上元雄ノ一

ト』(外間守善・玉城政美 一九八〇a『南島歌謡大成  
Ⅰ沖縄篇上』角川書店に再録)Ⅱ仲宗根・湧上ノートと  
略称する。

○安泉松雄 一九九一「安泉松雄ノート「イザイホーの御祭り」」

『久高島の祭り』と伝承』桜楓社Ⅱ安泉ノートと略称する。

○外間守善 一九六三『外間守善ノート』(外間守善・玉城政美

一九八〇a『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』角川書店に再

録)Ⅱ外間ノートと略称する。

○鳥越憲三郎 一九六五『琉球宗教史』角川書店(外間守善・玉城

政美 一九八〇a『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』角川書店

に再録)

#### 〈引用文献〉

畠山篤 一九九一「神々の船—久高島の外来神の去来—」『久高島

の祭り』と伝承』桜楓社

畠山篤 二〇〇一a「久高島イザイホーへの誘い」『萬葉研究』

(一七号) 萬葉研究会

畠山篤 二〇〇一b「イザイホーの次第」『奄美沖縄民間文学』

(創刊号) 奄美沖縄民間文学学会

畠山篤 二〇〇一c「久高島イザイホーの神歌の分類」『口承文芸

研究』(二五号) 日本口承文芸学会

畠山篤 二〇〇二a「イザイホーの桶廻りのティルル」『弘前学院

大学文学部紀要』(三八号)

畠山篤 二〇〇二b「イザイホーの元ティルルとタ(暁) 神遊びの

ティルル」『萬葉研究』(一八号) 萬葉研究会

畠山篤 二〇〇二c「イザイホーの朱付け遊びのティルル」『伝承

文化の展望』三弥井書店

当間一郎 一九七四「久高島のイザイホー」『沖縄のまつり』月刊

沖縄社

当間一郎・友利安徳 一九八二「神々のふるさと久高島」沖縄公論

社

比嘉康雄 一九九三a「神々の原郷久高島 上巻」第一書房